

出題分析		
試験時間 90分	配点 75点	大問数 5題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 <b>増加</b> ]		難易度変化 (昨年比較) [易化 <b>同程度</b> 難化]
<b>【概評】</b> 大問数が5題、設問数が39問（選択問題が38問、英文要約問題が1問）という例年通りの構成である。大問Ⅰの適語補充問題、大問Ⅱの内容一致問題、大問Ⅲの適文補充問題、大問Ⅳの対話文空所補充問題、大問Ⅴの英文要約問題という構成にも変化はなかった。大問Ⅰ、Ⅱは文章の内容がやや平易で易化した一方、大問Ⅴは文章量が増加、さらに新傾向となり難化したことから、全体としては昨年と同程度の難易度であったと考えられる。		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	適語補充問題 A「気候変動への傍観」 B「イギリスの呼称の使い分け」	A・Bともに、文章中の7つの空所に適切な語を補充する問題である。今年はこちらの文章も取り組み易い題材であり、また選択肢にも難単語は少なかったため、解きやすいと感じた受験生が多かったと考えられる。	やや易
II	内容一致問題 A「移住と伝統的食生活」 B「マリカナ鉱山の惨劇と資本家・労働者の対立」 C「『回想のこぶ』と人格形成」	A・Bは短めの文章、Cはやや長めの文章を題材として問いに答える問題。例年、設問文に続く一文を選ぶ問題と、設問文に対する答えとして最も適切なものを選ぶ問題がある。今年もA・B・Cともに、昨年と比較すると題材となる文章がやや平易であった。また、全体的に設問の解答根拠となる箇所がパラグラフごとに分かれていたことから、易化したと言える。	やや易
III	適文補充問題 「科学的知識に対する宗教・哲学的知識について」	長文中の空所7か所に英文を補充する問題で、選択肢は8つある。今年も文章の内容がやや難解であったものの、空所前後の指示語や、段落におけるキーワードをヒントにすることで正解できる箇所があった。選択肢が1つ余るので紛らわしいが、答えが選びやすいものから解答することで取り組みやすくなるだろう。	やや難

設問別講評			
IV	対話文空所補充問題 「スマートフォンに ついての会話」	対話文中の空所7か所に適切な語を補充する問題で、選択肢は13個ある。対話の状況は想像しやすいものであったが、選択肢には難単語や難しいイディオムが見られた。しかし、例年大問IVにはこういった選択肢が見られることが多いため、難易度としては例年同様である。	やや難
V	英文要約問題 「ある町にやってきた謎の男」	600語程度の英文を要約する問題である。例年同様、解答欄に書き出しが与えられ、それに4語～10語を加えて文を完成させる形式であったが、今年は題材となる文章が物語文となるという新たな傾向が見られた。また、文章量が昨年の2倍以上もあり、内容も平易ではなかったため、受験生は苦戦したと考えられる。	難

#### 合格のための学習法

文化構想学部では例年、英語の文章を要約して一文にまとめるという問題が出題される。課題文の要旨を的確につかめるよう、普段から文章の構成を意識して読む習慣をつけてほしい。この要約問題を含め、文章の題材は人文科学系から自然科学系まで多岐にわたる。焦らず取り組めるよう、様々なジャンルの文章に触れておくとよい。空所補充などに難問が出題されることもあるが、そうした難問を正解しなくとも、それ以外の標準的な問題を確実に得点できれば合格は可能である。安易なテクニックや不確かな知識に頼るよりも、まずは標準レベルの文法・語法・語彙を確実に身につけ、自分のものにしておくことが大切である。